

# 発掘された日本列島2011

小林 隆幸

みなとびあでは、八月九日(火)から九月十一日(日)までの会期で、「発掘された日本列島2011」展を開催しています。

「発掘された日本列島2011」展は、全国で行われている年間八千件ほどの発掘調査の成果を、いち早く、分かりやすく伝えるための展覧会です。文化庁が主体となって企画し、協力団体や会場となる開催館とともに実施しています。例年、全国数か所の会場を巡回しています。

今年度の「発掘された日本列島2011」展は、全国二十一遺跡から五百点を超える資料を集め、全国五会場で開催されます。東京都の江戸東京博物館を皮切りに、新潟市歴史博物館、静岡市登呂博物館、九州歴史博物館、高知県立歴史民俗

資料館の順で全国を巡ります。新潟市内での開催は初めてで、考古学ファンのみならず、新潟市民や県民にとって、全国の発掘成果に直に触れることができる絶好の機会となります。

今年三月十一日の東北地方を中心とする多くの被害をもたらした東日本大震災は、戦後の日本人が経験したことのない未曾有の大惨事となりました。原発事故の収束も不透明で、原発を抱える福島県民が不安な生活を送っていることに私たちも胸を痛めます。そうした状況で、福島県の二遺跡から出品していることは喜ばしいことです。なかでも古代の製鉄遺跡である史跡横大遺跡は原発に近い南相馬市に所在します。今回の資料も地震で混乱した状況にもかかわらず、

地元担当者の努力により出展にこぎ着けたと聞いています。居並ぶ資料の背景には、発掘調査、資料の整理・保管、資料の価値を見出し展示品とする地元担当者・関係者の努力があることをあらためて感じさせられます。

今回紹介される遺跡は、二万八千年前の旧石器時代から平成まで、北は青森県から南は鹿児島県までの範囲に及びます。新潟県からも佐渡金銀山遺跡と糸魚川市の山岸遺跡が登場します。どれも話題となった遺跡だけに、見逃せない資料が並びます。いくつかの例をあげてみましょう。

滋賀県相谷熊原遺跡の土偶は、約一万年前の縄文時代草創期後半にさかのぼる最古級の土偶です。簡略化された形ながら女性の姿をはっきりとたたどっています。女性を象徴する土偶作りのルールが、以後、一万年に渡って受け継がれてきたことあらためて驚かされます。

愛知県の一色青海遺跡からは弥生時代中期のシカの絵画土器が出品されています。高さ九センチメートル程の小さな土器の破片に、シカが縦に並んで描かれています。シカの描かれ方を一頭ずつ観察するのも楽しいでしょう。

奈良県の四条古墳群からは、形象埴輪や、鳥や笠の形をした木製品が出品されています。形象埴輪の中でも力土形の埴輪はユニークです。また鳥形木製品は、

まさに鳥が滑空しているような躍動的な姿をしています。

新潟県からは、山岸遺跡の資料が出品されました。山岸遺跡は、姫川右岸の小さな谷に位置する中世の屋敷跡です。出土した長柄の銚子(柄の付いた酒を注ぐ容器)の破片に傘の文様が細工してあることなどから、傘の紋を家紋としていた名越氏に因連する人物の邸宅ではないかと考えられています。名越氏は鎌倉幕府の執権を務めた北条一門に連なる家柄です。全国各地の資料が並ぶ中、日本史の視点から地元新潟の歴史を捉えなおしてみるのが新潟開催の醍醐味でしょう。

全国を巡回する全国展のほかに、開催地をテーマにした地域展も同時開催します。当館では、新潟平野の特徴を踏まえ、「海拔0m以下から発見される遺跡」展として、全国展に先行して七月二十三日(土)から開催しています。海面より低い土地は、生活の場として適しているとはいえません。しかし新潟平野では、かつての人々の暮らしの痕跡である遺跡が、海面より低い地中深くから見つかることがよくあります。それはなぜなのか?その理由を紹介し、実際に海拔0m以下で見つかった遺跡のいくつかを紹介します。

この夏、ぜひ、みなとびあへ足をお運ぶください。  
(こばやし たかゆき 学芸員)



土偶(相谷熊原遺跡)



鳥形木製品ほか(四条古墳群)

## 常設展示室から 黒船を描いたのとや伝右衛門引き札(複製)

引き札とは、店や商品の宣伝ちらしのことです。この引き札は、新潟の商人宿「のとや」のもので、原本は柏崎の黒船館が所蔵しています。左に記された「新潟湊雲林堂池仁」というのが引き札を作った人でしょう。店を説明した部分には「諸国商人定宿〇八のとや伝右衛門」と中央にあり、右には「越後新かた古三之町東側橋より下へ三軒目」とあります。現在の古町演芸場の向いあたりです。左には北蒲原へ船便を出していることを売り物にして、再来店を乞う文が書かれています。



図1 「のとや」引き札

しかし、引き札の図柄は、「のとや」とは全く関係ありません。また、この説明文は図柄と比べると少し傾いていて、版木の縁のような線も見えます。つまり、この部分は後で刷り足したもののようです。

図柄は黒船と外国の銃を捧げ持った兵士です。「頃ハ安政六年未四月二十二日七ツ時ヲロシア舟渡来ス、舟長サ三十間余、はば十五間余、同廿三日ヲランダ舟渡来ス、舟長サ四十五間余、はば十九間余」と説明してあります。

1858(安政5)年に幕府は5か国と修好通商条約を締結します。その中で開港場となった新潟を調査するために、翌年4月にロシアのジキッド号とオランダのパーリー号が相次いで訪れます。つまり、新潟へ最初に訪れた異国船ジキッド号の来航を伝えるかわら版です。かわら版に店の名を刷り足して引き札にしたのでしょうか。

では、この図柄は雲林堂がジキッド号や乗組員を見て一から描いたのでしょうか。実はこの図柄はオリジナルではありません。1854(嘉永7)年にペリーが神奈川沖へ再来航した際に発行されたかわら版の図柄を写し取ったものです。船首や船尾の装備、船員の配置や旗の柄、小舟の様子など、よく見ると簡略化されていたり、現実に合わせて直されたりしていますが、明らかにこのかわら版をもとに作られています。

初めての異国船到来という大騒ぎに、雲林堂はかつて入手したかわら版を持ち出して急ぎ版を作ったのでしょうか。このかわら版に店の名が刷り込まれ、かわら版を兼ねた引き札として、泊客や得意先に配布されたのでしょうか。幕末新潟の喧噪を想像させる資料です。

伊東 祐之(いとう すけゆき 副館長)



図2 ペリー来航を伝えるかわら版(「図説黒船の時代」(財団法人黒船館編 河出書房新社発行)所収)

### おすすめの1冊

#### 下級武士の米日記

桑名・柏崎の仕事と暮らして

江戸時代後期、柏崎は、伊勢(現・三重県)桑名藩の松平氏が飛地領として治めていました。

天保十年(一八三九)、国元の桑名から柏崎の陣屋へ派遣され、年貢米の徴収にたずさわった下級武士・渡部勝之助と、彼の養父であり、桑名で藩の米蔵の出庫係をつとめた渡部平大夫。ともに「米」にかかわる仕事に従事した下級藩士の父子は、百余里はなれた、それぞれの任地で『柏崎日記』と『桑名日記』をしるし、交わりました。

約九年の歳月にわたって綴られたふたつの日記は、はなれた家族の近況をたがいに知らせあうものでした。そしていま、時代をこえた日記は、私たちに当時の武士のいなみや、柏崎・桑名の生活文化を子細にわたり伝えています。

本書は、ぼつ大な情報量をもつ、この両日記を丹念に読みとぎ、藩財政の逼迫とともに困難をきわめた下役人の「米」にかかわる業務の実態をはじめ、子育て、食事、やまゝの折々の行事、旅など、けっして裕福ではないなか、家族とともに、たくましく生きた武士の日常をリアルに描いています。ぜひ、ご一読ください。

(安宅俊介 学芸員)



加藤淳子(著)  
2011年6月16日発行  
平凡社